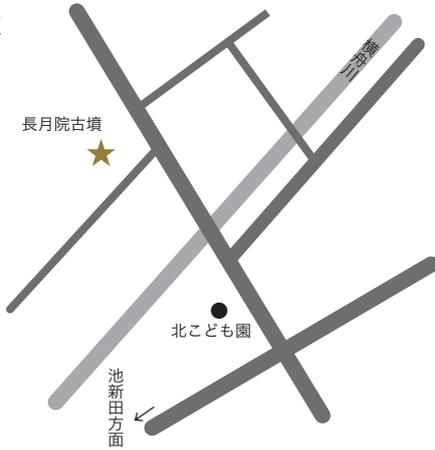




●市内朝比奈地区



埋蔵文化財包蔵地 **長月院古墳**

History

キラリを再発見

朝比奈地区の小型古墳

朝比奈地区の横舟に、かつて長月院と呼ばれる閑田院の末寺がありました。この北側の小さな山の先端に、直径15㍍、高さ2㍍の円墳があり、長月院の名をとって1978（昭和53）年に長月院古墳と名付けられました。この古墳には葺石や埴輪等の外部施設は認められず、発掘調査が実施されていないことから内部構造は不明で、出土品なども発見されていないため年代を示すものはありませんが、円墳の大きさからみて、6世紀頃に造られたものと推測されます。

この古墳は、1930（昭和5）年に刊行された旧『静岡県史』に「長月山の頂上は古墳らしい」と記されているものにあたると思われ、旧『静岡県史』にはこの他に、朝比奈地区の古墳として「岩地山神社を祀る岡も古墳」と考えられると記されています。しかし、現在この岩地山神社の古墳については確認されていません。

Atomic

暮らしと原子力

中部電力が津波の影響を評価

中部電力は、経済産業省原子力安全・保安院の指示に従い、現在の浜岡原子力発電所への津波の影響を評価するとともに、その対策をとりまとめ、4月16日に同院へ報告しました。

これは、内閣府の有識者会議が3月31日に「南海トラフの巨大地震」による震度分布・津波高の推計値を公表したことに基づき同院が求めていたものです。

この評価は、1・2号機が廃止措置中、3〜5号機は停止中という現状を前提として評価されました。この結果、原子炉や燃料プールの冷却機能が失われ、注水も停止した場合、保管している燃料が冷却水の水面から露出するまでには、最短でも約6日間の時間的猶予があることが示されました。この間に、津

波対策として海拔25㍍の高台に配備された可搬式動力ポンプを使用し、原子炉や燃料プールに注水することで、安全を確保できることも確認されました。

今後、中部電力では、継続的な対応手順の改善や訓練の実施により、緊急時における対応力の向上を図るとともに、福島第一原子力発電所の事故調査、中央防災会議の検討結果から得られる知見を詳細に検討し、必要な対策を講じるとしています。

▼可搬式動力ポンプの作動状況を確認する中部電力社員

